

書筋

20



芽出柳翠綠松前

七幕

(序幕)木挽町柳生郎の場、山城河岸米屋の場、(二幕 目)淺草雷門の場、旅籠町松前屋の場、新堀内藤屋舖の場、(返し)藏前捕物の場、(三幕目)上州袋輪山中の場、同真龍軒閑居の場、(四幕目)駿河臺大坪邸の場、木挽町柳生屋舖の場、(五幕目)半屋舖詮議の場、(同 返し)旅籠町松前屋の場、駿河臺大坪邸の場、(大詰)常盤橋内土手の場、吹上御評定所の場
松前屋五郎兵衛尾上菊五郎 坂倉屋甚右衛門中村芝翫 横目次郎兵衛 全 真龍軒實は 全 丸目藏人 全
柳生佐嶋守 市川左團次 柳生又十郎 市川右團次 一心 太助 全 松前屋番頭清衛全
左衛門 全 五郎衛伴松太郎 坂東竹松 衛門 中村仲藏 藏人子息京太郎 中村福助 卯之助尾上菊之助 坂倉屋の娘お浪全
十郎 市川小團次 荻原惣兵衛 大谷門藏 中間次郎助 全 次郎助母おもと全
高橋藤十郎 全 濱田主膳 全 米屋佐五兵衛 中村鶴藏 中間段助 市川荒次郎

近藤内匠 中村鶴藏 熊井傳平 市川荒次郎 用人門兵衛 全 中間金平 市川團若 宗矩の妾静江 坂東玄う調 金窪運平 全 五郎兵衛房お沙全 赤井綱助 坂東喜知六 若徒 九助 尾上松助 小家頭喜平 全 内田主計 全 手代與助 市川團八 六戸喜左衛門 全 柳生召仕おさが全 柳生腰元小菊 澤村源之助 中間權平 坂東竹二郎 坂倉屋下女お仲 中村歌女之丞 小島太吉 全 松前屋下女お富 尾上登美松 大坪中間權平 坂東橋次 茶屋娘おあさ 全 下男萬吉 全 松前屋丁稚三太中村仲太郎
中 祇園祭禮信仰記 金閣寺の段 大 切 是茗荷奇代良藥 常磐津連中 淨瑠璃 竹本連中 明治十六年二月七日御届 [定價八錢] 同日發兌 本郷區元町一丁目三十六番地 編輯兼出版人 齋藤長八 發賣元 京橋區築地二丁目廿八番地 中村重次郎

(序幕)木挽町柳生家の場本舞臺柳生家廣間煤掃の体爰に

「八」おさが(竹次郎)(橋次)家臣新相中五人中間よて目 若松様よト謠作(團八)を嗣として落スアイダ

此様よひと目と逢一た(竹)若徒の九助と云事を して居祝ひ(橋)是から俄小菊殿をとわやく云て奥へえ 入下手より燃三人出て(燃)本よ吉例とは云乍か煤取の胴 上で髪も何もだいましむ仕升たと奥より(源之助)燃小菊 振袖形にて出今お表の衆よ捕られ胴上よ逢升たが常成ぬ 體故目舞がして成升ぬ(燃)何ぞお樂を上升るか(源)少し 落付升た故粉薬には及び升ぬがわなな方を静江様が呼て 御出被成升た(燃)夫と有難うムり升そんら早う参り升 う兩人奥へは入(源)氣を領て居たせいか少しは落付たが 落付たぬはアノ若徒の九助殿無理遣よわたしの懐へいや らしい事被成ーがモシヤアノ時落せしと思入有てドレ モウ一扁探して見升ラト奥へ行懸る(松助)若徒九助出て

小菊様爰よお出被成升たの(源)九助殿かへ行懸るを引留 (松)あなたのお親御佐五兵衛殿が御錠口よ待て居升り私か 取次で逢せ升るか(源)サアと、さんよ逢たけれど今差懸 る(松)落し物でも有升のか(源)エとよして夫を(松)さつ き胴上の其時よわしが拾て其文の持て居升(源)夫は能拾 て置て下さんしたお禮は何成と仕升程よとよ不渡て下さ んせ(松)其禮よいわしか色に成て呉るト云件有て(源)得 心せぬ故無理よ抱付んとするを振放し逃るを追廻と此時 奥より以前の團八出る(松助)(源之助)と心得(團八)よ抱 付(源之助)逃ては入(松)やおさがか(團)九助さんかまへ はなアトトおかしみの格氣争ひ有つて奥より(門藏)荻 原惣兵衛袴大小上下より家臣(橋次)(竹次郎)中間四人附 添出て(門)御法を破る不義の兩人(家臣)兩人そこ一寸も 動くまぬぞ(松助)へエト平伏を(門)壁へ懸る者にもせ よ不義と御家の法度兩人共覺期致せ(松)不義せし上は御 成敗は兼て覺期にムり升(團)元私から仕懸け升と色懸て

はムリ升ねばどふぞお慈悲よ私丈は(門)エ、だまり居ら  
ふ女の取に足されと九助を理非も弁乍成敗受るを覺期  
と申せば元より悪と存てせしか(松)能と心得て致升たは  
上を見習ふ下とやら御家の又十郎様も不義して居升(竹)  
何若殿様が(橋)不義と被成て(中間)ムリ升どか(門)夫よ  
は何ぞ證據有ての(松)證據と云ひ此文又十郎様參る小菊  
よりト此時奥より若徒(才助)(源之助)を引立來る(門)コ  
リヤ小菊若殿ト不義致し居るに相違いか(源)知らぬと  
云譯する此時奥よて(まう調)靜江妾の拵、兩人附添出  
て其詮義暫く待や(門)スリヤ不義の御詮義を(まう)奥を  
預る此靜江炊の詮義は私が是小菊御當家の取分てお物堅  
ひと他家で御酌遊と程成ば御法を破る其者の所詮お詫の  
隠しても隠さぬ有体に云が能不義の相手ハ又十  
よも有まひ大方外の同名の者で有ふなど吞込せ  
せぬ疑數ば此文讀上升うと此時奥よて(右團次)柳生又

十郎アイヤ共詭書讀及ばぬと袴形一本差刀を提出で  
(右)不義の相手は面目かいが斯云柳生又十郎(繼)小菊さ  
んの不義の相手は若殿様でムリ升たかと皆々當惑の思入  
(松)何ぞ此九助が不義もまんざら無理ではムリ升まへ  
(團)小菊さんがおあかへ胤を舎と程能事を被成るもの私  
だとして致さすよひふられぬ(門)下の譏りを聞に付内分  
よと致し難し此趣大殿様へト此時奥より(左團次)佐島  
守羽織袴一本差にて出袴の上よ住ひ(左)襖越よ逐一様子  
承る他家への聞へ家來へのみせしめ悴は勘當小菊ハ幸ひ  
親佐五兵衛參り居れば引渡せト云一同詫るを聞き入れず  
(左)九助おさがも長の暇を遣すト是よて(右)(源)(松)  
(團)は是非なく向ふへは入(橋)(竹)(中間)(左)に辭義をし  
て奥へは入(左)靜江そちよも長の暇を遣す(まう)そりや  
何故よ(左)悴を勘當致せし上は老年の其か妾と置も何と  
やら又十郎が敗心なと時節も有は其時そちも歸參を免と  
すト道具廻る

(山城川岸米屋の場)本舞臺二重都て米屋の体爰よ(右團  
次)又十郎(源之助)小菊火鉢ふ當り居る(鶴藏)佐五兵  
片附居る(新相中)貳人出て來り親方お歸り被成  
湯へでもば入て來か云(新市人)ハイ、ト兩人下手へは  
入(鶴)先邪魔ハ拂た是か菊何もそんなにふさぐ事い  
(右)扱佐五兵衛殿さきたの娘は疵を付、剩へ只成の體ふ  
なし今更云譯も無次第(鶴)共御遠慮よは及び升ぬ私は娘  
が懷妊を悦て居升(源)夫では私の徒をお叱無(鶴)何で  
呵ろう町人風情乃娘若殿様のお胤を舎せは私の肩身も廣  
く此様お悦ひ事ハムリ升ぬト此時向ふより(まう調)靜江  
(門藏)惣兵衛出て門口にて(まう)お頼申升(鶴)どなたで  
ムリ升是は靜江様に惣兵衛様マ、くお入被成升兩人  
内へは入(右)思ひ懸無兩人共とふして爰へ(まう)私事も  
御前より御暇か出し譯を咄と(門)拙者はへ參りし御舎  
兄刑部様より御使(右)何兄上の使とは(門)刑部様ふは長

れ御病氣全快覺束無我よ替て家督を繼様改心あして劍道  
修行し父が勘氣の詫せよとの仰にムリ升(右)不所存の  
某を左程迄御慈愛深き兄の御詞いかよも異見よ隨ひ武  
術修行し諸國を巡り極意を得し上御勘氣御免と願わん  
(門)御改心有る上は御發足の貯金服沙包の金子を出そ  
(右)何から何迄添きひ(源)そんなら移なたい(右)思ひ立  
日が最上吉日と門出れ盃事有て慕  
(貳幕目)淺草雷門の場本舞臺雷門前の休(新相中)四人町  
人形(登美松)茶屋娘よて(登美)皆さんお茶をち上被成升  
(新四人)爰の姉さんはいつも世事が能てい、が悪いのは  
内藤の中間だ奥山を酔て歩行ていたが懸り合に成ぬ内藤  
り升ラト上下へは入此時(小團次)荒次郎團若(中間)よて福  
助のお波を引立門の内より出る跡より(歌女)之丞下女留  
乍出て(歌女)あなた方お嬢様を捕へてどふ被成升か(小)  
どうも斯うも有ものか此娘は酌をさせて呑のたト無理よ  
引寄る爰へ(芝翫)甚右衛門出て(芝)見ればおまへ方は大

ぶ酔ている様子が娘小供と捕へてからかひぬがよふふる  
(小)からかをふが大きにお世話だ是く娘おめへと爰で  
婚禮の盃事だ一べい香でくれ(福)アレ怖といふ(芝)コレ  
娘何も怖い事いふ(小)扱われぬ此娘の親父だお面白  
い此娘に付ての友達も知る通り祝言の盃迄仕たからそ女  
房は貫えよや成ぬト難題を言懸る(芝)思入有て金子を出  
し酒の上へでも有ふが是で不肖をして下せト詫るを中  
間入ぬ所へ(菊五郎)五郎兵衛(菊之助)卯之助をつれ出  
て来る中間三人を投退る皆々嬉敷思入(小)どこのどいつ  
か知ねへが何で無法と投たのだ(菊)無法と云ひか前方の  
事召連訴へでもそる奴だがこつちは事い好ぬか(四)五の五  
のなしと踊るがい、(小)何で只踊るものか(四)是でも内  
荒(御家来様だ(小)突出とやら出せト又ぐすり懸る  
子を出し中間三人と欺し歸して(芝)五郎兵衛殿  
は徳柔術好む元武士の事故思と云ぬが今の中間の  
新堀端で噂の悪い内藤様後日崇りを受様此後腕立らせぬ

がよいト異見をして我家へ歸る引違て(門藏)卯之助母に  
て出て(門)そあに居るは卯之助で無か(菊之)かつかさ  
ん久敷見へ升ぬが(門)誠より那樣へは無沙汰を致して相  
濟升ぬ(菊)何のく一人で睡因で有らが卯之助の兄と云  
はまた戻らぬか(門)旦那様へは委細事はお咄し申升ぬが  
兄と申を十一年前奉公先から扱参りに伊勢へ行未に行衛  
か(菊)夫の睡心細事て有ふ其替り卯之助よりわい力が  
と成程よ必き案事ぬが(門)是を聞悦ふ所よて道具廻る  
(旅籠町松前屋の場)本舞臺二重都て松前屋見世爰よ(新  
相中)の小揚米俵の繩を積込ドリヤ一ふく遣うかト奥へ  
は入向ふより(左)藏(右)の中間出て松前や五郎兵衛殿はこ  
ららかト奥より(右)四(左)の番頭清兵衛出(右)へく御  
用てムリ升の(左)手前主人新堀端内藤藤左衛門と申者  
拂米の事と付即刻屋敷へ御山下され(右)折悪く今日主人  
は他出致し留守よムリ升(左)然らば歸り次第参る様申  
て下されと立歸る(菊五郎)の五郎兵衛(菊之助)の卯之助

歸り来て門口を明(菊)旦那様のお歸りでムリ升(右)卯之  
助とん今日は御苦勞だのと(菊)内へそ入是清兵衛殿留守  
ホなんだか(右)ハイ只今ついで来た事もい新  
藤様から自身も来る様と申て参り升たが心當で  
もムリ升か(菊)サア大方呼よ来る心當と云は雷門での事  
柄を咄し居る所へ以前の(左)出て(左)五郎兵衛殿は  
未だ歸らぬか(菊)只今歸宅致し升た故直様お屋敷へ上  
り升と申て下され(左)御出有は主人へ此由申でムらふ  
ト云乍立歸る奥より(芝)調のお沙子役を連出て(芝)う  
こちろ人此子の可愛と思ふなら内藤様へ行事は斷り云て  
行ぬ様よと(右)ト共く止るを聞入る(菊)是非共参ら  
ねば成ぬ(右)左藤成ら様致し升時分を計りお出入郎  
の偽状を拵へ迎ひの者を差出し升から夫を沙ふか歸り被  
成升(菊)何もそんな内で案事する事はない大方お拂米の  
事て在ふが然し清兵衛どの思ひ付の其偽状は卯之助に  
持せて迎ひよよこそが云ト行懸る皆々愁ひの様子に(菊)

も行兼て氣を取直し(菊)日の暮ぬ内に往來する道具廻る  
(内藤邸の場)本舞臺貳重都て内藤邸道場の体上座よ(松  
助)の内田主計(鶴藏)の近藤内匠袴大小形り下に(小園  
次)の次郎介頭を下(小)御前どうぞ私の敵をお取下さい  
升(鶴)氣遣致すな共五郎兵衛と言奴以前は侍と申事し  
や(松)聞は此頃道場を開き當家の先生と悪さま申と由  
(鶴)憎くい奴ではムらぬか(松)此所へ呼寄て日頃の返報  
此時(新相中)の中間出て(中)只今松前屋五郎兵衛と申者  
参り升てムリ升(松)是へと申せ(中)ハ、ト下手へえ入  
(小)私のか次で拜見を致升らト下へは入向うより(菊五  
郎)五郎兵衛袴羽織形よて出来り平伏する(鶴)貴殿が聞  
及ぶ松前屋五郎兵衛殿よ(菊)御意よムリ升奥より(左  
四)内藤藤左衛門羽織袴一本差よて出(左)其方が五郎  
兵衛成の身の内藤藤左衛門成(菊)ハ、初てお目見得仕  
り有難仕合よ存じ奉升シテ御召の御用(左)外でもさい  
其方か手練を試さん爲じや(菊)何んと御意遊せト是より

(菊)の劍術を三人譽る事有て(左)某も一刀流の免許は受  
れど其業の貴賤上下の隔はない程は遠慮致さず身と立合  
を致して呉れ(菊)思ひも寄らぬ其仰高が町人の私か歴  
くのお方と立合杯とは及ばぬ事平に御ゆるし下さり升  
(左)いの程も申ても立合ぬか(菊)未熟の私か相手が出来  
升うや(左)未熟の汝か何故よ身が家来を打擲致せしや  
(菊)ヤ(左)武士も及ばぬそちが腕前(鶴)此場よ於て試は  
我々ど木太刀よて(菊)へ打て懸るを見得能止(菊)是非に  
及ぬ手向ひ御免ト鳴物に成試合も成る(菊)兩人を打居  
る(左)鎗にて(菊)へ突て懸り兩人試合の立廻り宜敷有て  
(菊)は(左)よ態と負(菊)恐入升てムり升る(鶴)我々共は  
送を取たが遠は先生(松)彼を打居召きたらぬ腕前よは感  
たト(左)を譽(菊)を懸口する(菊)あなた方の仰の  
よ歸宅致され升る是を御縁にお出入を(左)願ひ  
おのし遣と(菊)有難其か詞長居は恐れお暇致すでム  
り升るト花道よて(左)と顔見合せ氣味合の思入在て(菊)

向うへ這入(左)門弟はか詞は違わぬ神蔭の興義を極めし  
彼が手の内中へ遠く及ぬゆへ(鶴)スリヤ先生の勝を見  
へたのは(松)やうはり負でムるかちト此時(小)お頼に思  
ふ殿様迄何だか心細く成て来た(松)此上へ恥辱を雪ぐ彼  
への返報(鶴)能御思案はムるまゐるか(左)其思案ハムるト  
考る下手より(新相中)の中間出松前やの小僧めが手紙を  
持て迎ひよ参り升た故受取て置升た(左)其状是へ(中)ハ  
(左)手紙を讀コリヤ恚恨を晴と能計策が浮たわへ(鶴)  
夫はいかなる(皆)手段でムるか(左)兼て各くも知通  
り某々與は町奉行原伊豫守が娘あれば五郎兵衛は盜賊成  
と訴出罪に落す其手段は今宵我邸へ盜賊忍入金子を奪ひ  
逃る折家来共よ手紙を負せ逃失し跡も残りし此手紙を證  
據よ召捕て拷問なせば彼めり死罪(鶴)夫れば妙計(松)し  
て其疵人は(小)此次郎助に疵と付お役又立て下さり升し  
(左)小氣味の能やつだ然し只は付ぬ一寸壹兩宛遣とト此  
時(荒)四の中間出(荒)委細はあ次で聞升た(四)一寸

壹兩下さるから(兩人)疵を付て下さり升(左)然らば三人  
此場於てト刀と拔疵を付る宜敷寫

沙(四八)の手代(菊之助)の丁稚出て(菊)を見て(まう)且  
那樣よは此繩目(四)どう云譯で(菊)之(ム)升る(喜知)其子  
細と云の新堀端は旗本内藤藤左衛門の邸宅へ昨夜盜よは  
入たらふな(菊)盜よは入りし覺へさいと云此時(小四次)

人(喜知)コリヤ町役人申付たる通り木戸は残り打たで  
有ら(家主)仰渡の如く嚴敷番を付置升たト向ふより  
(菊)五郎兵衛羽織着流して出(菊)名主から急よ来いと  
迎ひだが見れ木戸を打た様子御藏よ何か有つたるの  
(菊)舞臺へ来る後より手先兩人五郎兵衛御用ト十手よて  
打て掛るを押(菊)理不盡に何と被成升(喜知)御用の筋有  
て捕ると云を子細聞ぬ内は繩に掛らぬと云を捕手大勢  
(菊)を捕めんと柔術の立廻り有て(菊)子細を聞ぬ内は繩  
に掛らぬと云を家主大勢口へ御奉行の御下知と有れ  
を一旦繩よ掛つて中開をするがよい(菊)皆さんが事を譯  
ていわる、故繩よ掛るの都合なれど奉行の二字よ負升  
て爰で繩に掛り升ト(菊)よ繩を掛る向より(まう調)のお

れたのだ(菊)此身に覺へのあき拵らへ事だト云と賊事  
也と兩人云争ふ(喜知)是五郎兵衛へ何と申そよ此方  
よは證據ものが上つて居るぞ(菊)證據の品とわいやるは  
(喜知)其證據ハ生駒の邸から五郎兵衛名宛で届た手紙を  
内藤殿の土藏の内に落て在たが書上た(菊)何生駒様の  
手紙とは(まう)其御手紙は卯之助が内藤様へあきたのお  
迎ひに持て参り升た(菊)其手紙は届のぬ々借の手紙を宙

で斗らひ斯ういふ事を工んだあ今自身番で言譯せる共所  
詮御取用ひは有るまゝ此上の奉行の白洲で申解のん(喜  
知)夫五郎兵衛を引立イト番太郎繩を取る家主の氣の毒  
と云心(まう)(團)(菊之)泣伏す(小)味くいつたと云思入  
よて幕

(二幕目)上州箕輪山中の場本舞臺箕輪山中爰よ(尾登五  
郎橋次)雲助にて焚火よ當り乍(新相中)の百姓二人どふ  
た此頃は儲かの(尾登)どふして夏と違て霜枯故伊香保道  
の駕昇り上つたりだ(橋)どふせ利道お事じやア味へ酒も  
呑ねへららい、鳥の掛の焚火をして待て居るの(百  
姓)焚火で大きに暖まつた二人は入向より(新相中)

昇二人(源之助)の小菊を山駕に乗出て駕昇り雪風で  
湯治場迄早く行ふと云(源)駕やさんと、さんが  
で待合して下さんせ(駕)畏り升たト駕を御す  
湯(抱子のまめしを直杯する此時駕昇二人(尾登)(橋)と  
耳語合(源)と無理に駕よ乗足早に上手へは入(鶴藏)の左

五兵衛旅形りよて出(鶴)目らじの間へ沙利がは入たゆへ  
履替て居る内娘の駕を見失のふたモン今方赤子を抱て居  
た女が駕へ乗て通り致し升ぬかト尋ねてもわざと知ら  
ぬと云故(鶴)行ふとするはづみ息杖ふ爪付轉ふ(尾登)  
ヤイ親父息杖を折つたな(橋)商賣道具を折れては家業が  
出来ぬトゆもり掛るを(鶴)詫るも聞せ杖よて(鶴)を打よ  
掛る此時以前の駕昇二人(源)を引立來り中へ割て入(源)  
父さんか(鶴)娘孫をとふまやつた(源)此先の山中(鶴)  
孫めが一人居やるとか夫は大變だ娘來いと行うとどるを  
皆々支へる此時後の敷と押分(松助)の九助出て(鶴)を松  
の木へ縊り付(源)を引寄(松)お菊おれを見忘れたか(源)  
やお前の若徒の九助殿爰へせとふして(松)二年此方心を  
懸た思ひを爰で晴させて呉と云と探が立ぬを九助の心よ  
随ぬと云を手短まなぐさまんとする爰へ(小四次)馬乗袴  
大小竹刀の先へ面小手を付是をかつき此中へ割て入(源)

(鶴)を救ふ(松)ヤイ侍何で邪丁をするのだ(小)我の高崎

在又往浪士成が此山中を通懸りしに旅人を惱ます雲助共

る又又老立入たのだ(松)居らざるか世話よ出しや張  
せばうぬも生ての置ねへぞ(小)身の程知らぬ

後向旅人の妨げ故此場よ於てこらしくれん(松)面  
たやつ付る(皆々)合点ト息杖よて打て懸る(小)鉄扇  
よて皆々を相手よ立廻り(新相中)の雲介一人當れて倒る  
皆く上下へ逃ては入(小)口程にもなぬ奴等だあア(鶴)

どふ成事かど存升たに(源)危き所をお助下され(鶴源)有  
難ふ存升る(小)其禮よは及ばぬ事見れば旅人なるが何れ  
へ參るのじや(鶴)上州邊よ尋ぬるか方がムり升て今日伊  
香保の湯治場迄参り升(源)道よて親子が只今の難護とあ  
なたの御越で助り升てムり升る(小)此山道は街道成を察  
る所是へ連込奴等が工み湯治場迄は日の有る内よ行難し

又候妨きさんも知れず我寓居は此近邊故今宵一泊成明  
朝參るがよい(源)お詞に甘イお頼中は此先の山道よ駕へ  
乗せし乳香子か残しムり升が夫迄御一所に(小)夫は氣遣

成んレテ其所(鶴源)最前無体よ連行れし故知れぬト云  
(小)も常感の思入倒て居る雲介よ目と付是に活を入れる  
雲介心付(小)を見て逃んとするを捕へて(小)駕を何れへ  
置し其所へ案内致すか左も幸いと此所で眞二ツツ致  
す(雲)御案内致升から命はお助け下さり升(小)案内致  
すと有れを助遣とト雲介先案内とる此模様宜敷道具廻  
る

本舞臺所々杉の立木都て前の山續能所に抱子を乗し山  
駕を置向より(右四次)の又十郎袴のつを取大小草鞋矢  
を背負弓を持出て(右)師匠の命に是非無も小鳥狩よ趣し  
が今日は母の忌日故得物乃無が是幸ト此時赤子頻りに泣  
(右)此山中よ赤子の泣聲ト下手へ來る此時狼駕の傍へ  
來て赤子を覗く(右)の弓あて狼を突退る狼怒て飛懸ると  
抜打よ切る狼は苦しむ乍逃ては入(右)血をぬぐひ鞘へ納  
め(右)駕の内には小兒のみ邊りに人の居らざる爰へ捨  
し物成か此儘打捨置時は狼のゑいさと成ん是成る小兒を



助も母が忌日は能き追善ト泣入る赤子を懐へ入(右)何れの誰が小兒成か行衛を尋ね渡し遣らんと抱子をいふり付乍上手へは入向ふより以前の雲介先に(小)鶴(源)出来り(小)そちが駕を置し所は何れじや(雲)向うの森の内には置升たト是まで舞臺へ来り(鶴)源の側へ寄邊りを見て赤子が見へぬ故驚き(鶴)邊りよおびたいしい血汐と言そんなら孫めは狼に喰れしか(源)ど、さん旦那様へか目にも掛を聞か獸物の糸じきと成いと顔が合され升る私生てり居られぬわいな(鶴)尤じやくそち斗り殺しはせぬかれも一ツ所よト兩人死ふとするを(小)留て(小)コリヤ待死は及ぬ小兒の死骸の見得を共是見よ邊りよまたる此血汐は刀で切たる血の跡察る所狼を切小兒を助け行しよ相違なし今死る命を長へ小兒の行衛を尋ねられよ(源)其か詞(小)死を止り(鶴)今宵を御宿をお願ひ申孫が行衛を尋升る(小)然らば斯う来やれト此模様宜敷道具廻る

真龍軒閑居の場本舞臺中足都て山中壹軒家の休爰よ(福)

郎橋形り(荒次郎)永澤柳藏(團若)金羅運平(竹)

木太助門弟よて稽古着袴形り鎧々竹刀を持(福)

人懸りみて試合の立廻り有つてト三人乍打れ(荒)若先生よ打れるは是非もあいが(だん)貳年此方御當家へ暇客の柳生の俸(竹)又十郎よ送れを取が(三人)心外でムるト向ふより以前の(右)抱子を懐つよ入出で(右)我懐ろの暖りよ心よふ寝入かる此儘戻るも師の手前幸ひわれへ寝かし置かんト下手の大樹のうろへ入れ(右)只今戻り升てムり升る此時奥より(芝)眞龍軒出て(芝)今朝よりの雪催し又十郎よは山狩よて定めて凌ぎ兼たて有う(右)勿体なれ其仰せ聊厭ひは仕らぬ(福)ヤ何ぞ得物ハ(右)其得物はト口籠るを門弟の(荒)見受けし所袋の内よは小鳥一羽からざる櫛子(團)大方鳥を射損じたのか(竹)但何所へ參て遊で居たのでムらふ(右)今日は悪敷一羽も出逢す是非もあき義でムるト此時日覆より雁三羽

舞下る(芝)峠を急ぎ飛かふ雁又十郎早く射て落せ(福)迎もの事よ三羽並びし中成るを射落し見せられよ(右)心得升たト(右)弓矢追取規を定め雁を射落し(右)仰の如く射落升てムり升るト(芝)雁と見て(芝)今射落せし此雁金羽がいと抜て助けしは何の子細の有ての義か(右)恐入たる師の仰せ今日の母の忌日故小鳥の愚か雁金の羽がいと抜て助けし段平よ御免し下さり升(芝)特より忌日と知つたから山狩の言付さいよ直様此雁放し遣せト(右)雁の矢を抜雁の日覆へ飛去(福)又十郎殿の日頃の手練中く余人の及ばぬ所ト譽る此時門外よて赤子泣(福)表に小兒の泣入聲(右)其泣入小兒は某が召連参つて門外よ(芝)定て冷る事て有ふ早々内へ連られよ(右)先生の御免し成ばト赤子と抱内へ入(芝)其小兒は如何致して召連し(右)今日の山狩に深入なせば山駕よ此成小兒既よ狼の糸じきと成るを助けしが親は何れの者成か(芝)定めし尋ね居て有う門弟共改め遣せ(荒)團竹(長)り升たト抱子を改め巾着を取

出し中を明ヶ讀乍見分臍の緒書を見て(竹)寛永五年五月五日誕生柳生又十郎倅又市ト是を聞(右芝福)顔見合せ扱わと云思入(荒幽竹)又十郎殿御身々倅でムらふな(右)同姓同名は儘有る故知らぬと云(三人)當こするせりふ有て(福)最前此所で貴殿の様子を見受しが懸る證據の有上は彌(御子息でムらふがなト急度云(右)術なき思入(芝)又十郎今改めてそちと師弟の縁と切し(右)何故に先生は(芝)何故とは愚也汝門入の折我は懺悔致せし(小)小菊と密會なして居たりしを物堅佐島殿世間を憚勘當の身と改心なして我への頼み柳生殿とは同門の因を思ひ修行の爲と淫酒を禁め血刃迄致(乍)今日と相成誓を破るしからは師弟の縁も是迄成り何へ成と立退て再び心を磨くは今日限りなるぞト行懸るを止(右)そこを何卒今立る夫迄を(芝)詞替とも穢しいト振放し奥へは(福)思入(荒幽竹)ク様お者と同席せんより村境の炎賣屋よて一杯呑んとト三人向うへは入(福)は氣の毒

成る思入(福)何を申も一ト向成父上の事成ば執成ひまも無場合一先爰を立退れよ(右)御子息迄も御立腹よて(福)何の一ツの功だに立ば其時こそはお詫せんト奥へは入上るりよ成赤子を抱き(右)今先生のお詞に再心を磨けよと仰り我の的中せり元の起は我子から小菊に心奪れしとの御立腹不便乍も我子を打て潔白立んと差殺らうとして殺し兼(右)今殺さるゝも知らせして笑て居るいつそ小兒を助け切腹おして我身の疑惑を晴さんト腹を切ふとして(芝)今切腹致しなば二年此方先生より御教諭受し大恩を水の泡よると道理コリヤ大の出より小兒と殺し言譯ケ立んと抱子の胸元をさゝんとする此以前より(小)芝(内)外にて伺ひ居て(芝)心体見へた(小)死するの思ひ止まらざるト聲を懸上手より(芝福)下手より(小)以前の(鶴源)を連出る(右)先生と云坂部氏待とお止め有りし(芝)心体見拔上からの殺すよ及ばぬ我替友たる佐島殿へそちを歸參の時至れり此場よ於て極意を示さんト鳴物よ成(芝)

(右)へ傳授する立廻り有て(芝)會得あせしか(右)得と會ふる(芝)奥義の一卷譲るぞよ(右)奥義を極めし直さま出立ト立上るを(芝)コリヤ待門出を祝さし舞やれト(福)舞の振に成是にて道具半廻し(本舞臺)以前の道具の横手を見たる体(右)万事の宜敷(小)委細承知(右)是より發足ト行懸る(小)抱子を見せる(右)見て別れを惜び(源鶴)(小)の袖わきより顔と出し(右)と顔見合せ(右)氣を替ツカ〜と花道へ行此模様宜敷幕(四幕目)大久保邸の場本舞臺二重大久保玄關先爰に(鶴藏)の用人袴形(橋次さい助)中間よて(橋さい)此頃の風の吹ので温のせへか肴やの聲が仕ねへ(鶴)魚やと申せば太助が来ないので魚の味を忘れて居るが早く来てくれよとよいト向うより(松助)の九助をぼろの形りよて出て(松)へいお頼み申升(鶴)どちらからのお使たな(松)使でムり升ぬ柳生の若徒九助と申者若で體が利ぬら湯治

よ參り升が御前よ草鞋錢をお貫申に出升た(鶴)何だ又者の分として御前よ見らじ錢を貰つて呉る杯と左様な取次が出来るものか(松)そういふと取次でおくんなせへ(鶴)達て兎や角申と御門前へ摺み出とぞ(松)何もそんな怒る事なねへかせア借ねへ迄の事だト(松)向うへは入(橋さい)旗本屋敷へぐすりに來るといふ呆れ返つた奴だト向ふより(右團次)の又十郎大旗形で出て(右)お頼み申升(鶴)何れからお出成れしぞ(右)拙者の武術修行の爲諸國を廻る者でムるが御主人にお願ひ有て參て(鶴)何成る願か存せぬが御姓名が承度(右)懸る姿で姓名を名乗る面目無事乍拙者の柳生又十郎でムるト此時奥よて(仲藏)何又十郎が參りしとなト云(仲)彦左衛門羽織着流一本差刀を提出て(仲)又十郎殿の遠慮はいらぬこちらへ通らつせへ(右)左様成ば御免下されト玄關より上り貳重平ふたいへ住ひ(仲)茶の仕度でも致さぬか(鶴)畏り升たト(鶴)橋さい(奥)へは入(仲)借久〜にて對面一たが



以前と替る顔形ナ(右)仰の如くかん難辛苦を致せし故自  
然と面も瘦かどろへて斯の姿最早三ヶ年も相立を勘氣の  
詫と致し度御口添を願ひんと推參致してムリ升る(仲)  
大方詫で有うと推量は致したか中々容易事事で承知は  
せまいが先第一の詫の種は劍術だが天晴修行の功が積だ  
る(右)いかにも指南を受し師匠の死を受て歸國致してム  
る(仲)師匠と云は誰成ぞ(右)上泉伊豫守の高弟九目藏人  
に開傳受し一部始終と語る(仲)其九目氏と云は眞龍軒連  
世の名高き者(右)然し此義は内々にて只諸國を修行せし  
と仰下され(仲)承知致した此時奥より(鶴)盆へ土瓶茶碗  
を乗出(鶴)お茶がは入升た(仲)火急は柳生殿の邸へ參  
程は馬の用意を致せ(鶴)畏り升たト向ふより(左)四次  
守上下大小形り(飯八)若徒中間付添出(飯)頼う  
れト玄關へ出(左)を見て愕りし(鶴)旦那様柳生  
しでムるト是まで(右)は奥へは入(左)案内は連來  
りて(左)今日は刑部が忌日故佛參なし久敷る元は逢ぬ

故いかゝとお寄り申た(仲)能く御尋下された貴殿も拙者  
も能い年だが心の昔も替らぬから今の若い者のそる事は  
氣よいらぬとお互ひに悪口を云事有て(仲)佐島殿に折入  
て頼みが有が聞入て呉まいか(左)頼みとは(仲)外でも  
ない又十郎の勘當免して呉まいか(左)悴が事さら打捨  
置下されと云を種々詞を尽説るを聞入れぬ故(仲)然らば  
貴殿と試合あり又十郎が打勝なば勘當免し下さるや(左)  
いかよも勘當免すでムらふ(仲)幸ひ又十郎は以前と姿變  
り居れば武術修行の者と偽り夜入て連參らん(左)成程  
是の能御手段他人の積りで試合致さん然らば邸へ歸つて  
相待申ト(左)先(飯)中間付て向うへは入奥より(右)出  
て(仲)へ禮を述る(仲)定て奥で聞たで有うが佐島殿を打  
程の腕に覺が有か(右)十ツが九ツ勝を得る氣でムリ川が  
子として親を打ば不孝ト玄關へ行菅笠を持來り(右)試合  
の節は此菅笠父のつむりへ冠せなば手前が勝とお極下さ  
と(仲)ム、面白ト云乍(仲)刀を抜むね打よ(右)へ打て

懸る一寸立廻り(仲)へ菅笠を冠せ(右)まづ此やうに致升

取り辭義をする(仲)感心の思入よて道具廻る

場(本舞臺都て劍術稽古場の体爰(門藏)の用

術修行の者と同様に御出の由掃除方端能ムるの(音

門)隅迄行届居り升る(門)殊は試合の席の人拂故透見

杯の相成升ぬぞト此時下手より(飯八)出只今御臺所へ御

追放に相成し若徒の九助が參り御合力を願ひ度と申參升

た(門)夫は相成らぬと追歸して仕舞ば能に(飯)色々申

ても歸升ぬ(音門)然らば我く夕追歸してやり升う三人

下手へは入るト近習燭臺を出を向ふより(仲)の大久保奥

より(左)の佐島守出て兩人一禮有て(左)先刻申せし試合

の儀又十郎へ御傳へ下さしや(仲)何にも彼が申よは試

合よ致せ親を打は不孝の至となれを試合の内よ親父のつ

むりへ菅笠を冠せたら勝も致し呉よと申された(左)憎ッ

く過言柔弱の我悴といがい手並り知れてムる(仲)何ん

兎もわれお呼下され(門)夫に扣へし九州の浪人大久保様

のお召故是へお通り成れませト向ふより以前の(右)菅笠

を持出て來る(仲)是が則お咄の九州の浪士でムる(左)御

浪士の生國御姓名はト是より(右)偽名を名乗劍術修行

を余所事と咄と事有つて(仲)余談は差置試合の勝負(左)

いかよも左様コヤ物兵衛木太刀を是へ(門)畏つてムリ

升るト(門)長短の木太刀を真中へ直そ兩人前へ出(右)手

前が勝ばかつむりへ(左)見事乗て見せられよト(左)の上

段よ構る(右)は片手に菅笠を持下段に構へ兩人立廻り宜

敷有てト(左)笠を冠せ(右)は下手に平伏せる(左)成

程是の勝れし手練門)驚入てムリ升る(左)其方が太刀

筋の神蔭流の極意丸目藏人よ指南を受し(右)潛入する

御眼力何にも傳書の一巻讀受てムリ升るト一巻と見せ

る(左)當時世界よ此極意を傳る者藏人乃外有ざる故左こ

そと推量致したり勘當免し遣と(右)有難く存升る(仲)

口添致せし某も悦び(左)其悦びよ引替て世を去りし兄

刑部そちが剣道上達せしを見せぬが残念なりト愚智を云  
事有て(左)此場は於て對面させんと(門)奥より机の上へ  
位牌と刀を乗持出(門)御舎兄刑部様にムリ升る(右)位牌  
ふ向ひ御勘氣御免も兄上の御影と涙乍は禮を云(左)記念  
の刀と取上(左)此一刀を世にも稀成郷乃義弘刑部が遺言  
故記念と遺言(右)兄上の記念とや(仲)名は聞及べど未だ  
中心を見た事がない後學の爲見て置ん燒刃金色天晴業物  
定て切味も(左)求一儘故試し升ぬト下手より以前の(松)  
出て此九助が一ツの御願ひ其刀で私をお試成れて下さり  
升(左)何んと申(松)是迄の悪事の次第を並べ討亡しに試  
切よしてと願ふを(左)改心有からは罰を免し元の如く召  
わん(門)此御悦びは三年前暇に成し静江藤小菊殿もか  
月様と願ふ(左)歸參を免を程よ呼に遣せト下手より  
やめ(出)て只今静江藤小菊殿が參られ升(仲)是  
セト引返しては入下手より(老)調(の)静江(源)之助  
の小菊抱子を抱出る(左)又十郎の勘當免せば静江初め小

菊が罪も免し遣(老)源有難存升るト赤子泣(左)見  
て小菊が抱きしめの小兒は(老)又十郎様の御胤ムリ  
升る(仲)小菊とやらハ武家の種と申事彦左衛門が娘と  
し又十郎へ遣さん(右)御老体のお取斗らひ(老)源御禮  
の詞に尽され升ぬ(仲)然し媒の宵の内お開と致そうト  
(仲)立上る皆々悦ぶ事宜敷幕  
(五幕目)牢屋敷詮議所の場本舞臺中足の貳重牢屋敷の体  
下手附家体の内(門)藤次郎(八平次)の醫者  
(新相中)の張番二人(八平)今日ハ松前や一件よ付何れも  
御出役御苦勞も存る(張番二人)最早ハ刻限にムリ升れば  
支度致すでムリ升るト奥より(新相中)の小人目付先ハ徒  
士目付出る後より(小園次)の高橋藤十郎(松助)の穴戸喜  
左衛門出仕(門)是ハ御目付衆を始め高橋様は先  
頃より五郎兵衛めを再度のお調べ(荒)又今日は穴戸様  
御添役と申事(徒士)早刻限でムれば五郎兵衛の(小人)調  
べを是よて御初成れ(松)高橋氏が此程より再度詮議を致

されても口を明さるしとさやつ(小)町人との申せ共中  
くの吟味で白状では(松)辯以前が武家ももせ  
分として武器杯を隠し有りしは不審の第一今日  
白状させてお目よ懸ん(小)然らば手前ハ一應の詮  
議をなし半間はそこ元にか任せ申(松)夫は手前が望む所  
五郎兵衛卯之助を是へト上手板羽目の口より鍵番先よ  
(菊五郎)の五郎兵衛お仕着せ形り手錠(菊之助)の卯之助  
同様張番二人附添出る(小)先達より詮議なせども覺なき  
と申張が其分又は相成ぬ今日ハ穴戸氏の御掛と相成御詮  
議有れば今一應申上(菊)恐下申上先方の見知人の皆  
拵事又證據と申升るは卯之助が持參の書状を取上賊よ  
は入し其場所に落散品杯と訴出無實の罪も私と落と工  
の内藤殿夫故知らぬと申より外よか答へムリ升ぬ(松)  
其方九月廿日の夜内藤殿の邸宅へ忍び入土藏の錠をよぢ  
明金子を奪立退折三人の中間見付られ手錠を負せし其  
折よ落せし書状ハ是天命退れぬ所と白状致せ(菊)其夜ハ

在宅故覺なきといふは召仕一同が證人と云を縁者ハ證人  
ふ成らぬと云(さく)の其手紙は私ハ御家來に渡し升たが  
不調法盜には入た跡も有りし杯と拵へ事でもり升る  
(松)かのれ迄が虚言を拵へ上を偽憎くさやつ扣へおろ  
うまだ夫斗でない町人ハ不用成る錠兜の出所を申せと云  
を(菊)故有て申難し(松)然らば盜賊の白状とるか(菊)譬  
へいの様仰せ有る共内藤かたへ私が忍び入りしと訴へ出  
しは覺へもなき無實に相違ムリ升ぬ(小)遺恨とはいか成  
る義じや(菊)劍術ハ勝し増荒を申上る(松)ハ其方が負し  
を遺恨も思ひ内藤方へ忍入りしと相違ないわ(小)其勝  
敗を世といふ水かけ論錠兜の出所知れざる内ハ賊の汚  
名は退れぬぞ(菊)いか程に御詮議ムリ升ら共只今申上ら  
れ升ぬ(松)言づいといてやらう打役衆お縛り成さすト  
(門)荒(菊)の手錠を取り繩を掛箆尻にて打居る(菊)ハ  
役人様私を拷問ハ掛日那さまはゆるし下され(荒)丁  
稚めぬかさぬか言をば斯してト(菊)之を打とへる(松)手

ぬるく五郎兵衛は石を抱せ下雅は釣しよお掛成れ(門  
荒)心得升(菊)を柱へ縊り付けそろばんの上居石  
を段くよ積責る(菊之)の宙へ釣上箒尻又て打(菊之)苦  
しむを(菊)も苦乍見て責苦を助けん(菊)拷問暫くか  
待下され(松)待とは白狀致とか(菊)白狀致升るト兩人の  
責をゆるめる(菊)今日迄包み隠せしが内藤方へ忍び込金  
子を奪ひ中間に手疵を負せしと云を(菊之)主人をかばふ  
を(荒)手荒く引退下雅めだまりおろ(松)口の明たる其  
序鑑兜の白狀させんと此時七ツの時斗(小)刻限成は歸  
半申付ん鍵番衆ト呼鍵番出て来る(小)兩人共勞れし様子  
釣臺是へト張番四人釣臺を持來り(菊之)を乗る(小)い  
たどつて遣せト(松)に會釋して立上る皆く釣臺と昇上  
りやう宜敷幕ツナギニ成る

場(本舞臺貳重都て松前や裏口の体(團八)の手  
の下女(仲太郎)の丁稚(竹松)の松太郎皆く  
百度を踏で居て(團)か預中の事だのら毎日く内でお百

度を上か願申も八幡様の御利益で旦那さまの明りの立よ  
ふと皆く此様を筋といつて居る路次口より(門藏)卯之  
助母にて出御新造様のお見舞い参り升た(登美)夫の能く  
お尋ね下されたト上手へ行卯のどんのお袋さんが参り升  
たト障子と明る(まう調)れ女房病人の拵らへ(福助)の  
お浪娘形り(まう)か元服噺とあさも心配と察して居れと  
心よ任せ能見舞て下された(門)承れば惚めが旦那様へ  
お手紙を渡さぬが身の誤り夫が證據は御入牢と申事(福)  
元の起りは私しおらか氣の毒で成り升せぬト路次口より  
(芝)の甚右衛門(七)の子僧を連出る(竹)伯父さん今  
日(芝)松坊か土産を買て來たぞト劍術遣ひの人形を遣  
る(竹)母様人形を買ひ升た(まう)能おまやを買たの(芝)  
娘病人の少しおよぬか(福)お兄様御出牢と成れぬは  
御全快よは成らぬと云(芝)案事事いある赦免も成ると  
いふ事を聞て來たと皆くよ悦せる(右團次)番頭清兵衛  
よて出て是の茅町の旦那よ御出成れ升た(芝)よきたも

毎日つてを求めて歩行とやらいかむ苦勞を懸升の(右)今日  
參升て牢内の様子を聞升たが響の通り此世の  
責苦も途升との事(まう)どんお責苦も途のじ  
の(右)其牢間と申升のいと云懸る(芝)ハテ地獄の  
沙汰も金次第手當をして有たら案事事いいと(菊五  
郎)の横目役出へ一旦那今日の横目の治郎兵衛でムリ升  
(右)(まう)替つた事でも有りいせぬか(菊)替つた事が有  
たら知せて呉とのお頼み故出かけて参り升た(芝)凶事  
か吉事か聞せて下され(菊)五幕目の責の筋を咄とを聞者  
く怒のせりふ有つて(菊)旦那様に責殺されても知ら  
ぬ事故とごごと迄云張お心でも主人をかばふ子供の責  
苦が助たいか様子で盜賊の罪も落たる昨日の様子ト皆  
々愕あし(皆)夫でお仕置よお成り成さるのかおな  
(菊)罪もお落成れても鎧甲の御詮議が殘つて居升れば早  
く手を廻し奉行の一目置所からお聲懸りななければお命  
の助るまゐと夫でお知らせ申よ参り升た(芝)深節よよふ

知せて下されたと(菊)へ金を遣(菊)是の無度お心付有難  
ふム升と(菊)歸る此内(竹)の持遊人形の首落る(竹)人  
形の首が落た(皆々)氣懸る思入(左團次)の太助魚賣の  
拵へ盤臺の荷を擔出て(左)魚やの太助でム升大さよ御無  
沙汰致升た(右)太助殿か久敷見へ升ぬの(左)在所へ参り  
漸くおど、お歸り久敷振で商ひよ出のけ今お隣で様子  
を聞愕り致してお見舞い参り升たが御入牢の委職聞せて  
下され(右)隣で聞たと有は荒増の知つてもいよふが雷  
門で中間を徳たが始て劍術の意恨より内藤が町奉行に引  
の有るを幸ひよ無實の罪に落し近々仕置に成ると横目役  
の咄し(芝)こなたの心當りで能手づるの有まいか(左)夫  
成ればお案事成れ升るなわが親分の彦左衛門様から  
横鎗を一本入れれば向ハひやくもの事よ寄ると先の奴よ  
腹でも切せて遣り升る(芝)何ふん共よ太助殿(左)大丈  
夫でムい升と(左)荷をかつきは入(仲太)人形の紋と見て  
(仲太)此人形よ内藤の邸の紋が付て居る(右)誠に願よ有

りく下り藤(芝)扱の向ふの首が落る(去ら)神のお告で  
有つたるかど皆く悦ふ事宜敷道具廻

(大久保邸の場)本舞臺中足の式重大久保藤手口の体愛ふ  
(鶴藏)の用人下手(橋次左い助)の中間(鶴)此酒は余り  
斗が高みではあいか(橋左い)其等でムリ升去年から拂ひ  
をせぬ故どこでもお断でムリ升向ふより(左團次)の太  
助荷をかついで出て(左)魚やの太助でムリ升大きに御無  
沙汰を致升た(鶴)太助か秋葉へ行と往たがいつ江戸へ歸  
つて来た(左)二三日後に歸り升たが親分よお目に懸つて  
願たい事が有から取次で下さる(鶴)今は客來で取次ぬと  
云をせひ頼むを聞入ぬ替は鯛を買て運ると云賣ぬと悪口  
云(鶴)呆て與へは入(橋左い)是太助藤田さんが御前よ  
を付て云時は手打すると云ふも知れぬ早く逃る

(左)狸親仁に殺され、ば本望だト(鶴)出て御前に  
庭口より我目通へ廻せと有る仰だ(左)夫でこ  
つちの思ふ盡(鶴)何だどおれの命の今が年明だト笑ふ三

な死悪口をし命を替て五郎兵衛の危急を救ふ汝が心底不  
模様宜敷幕

(左)そんなら是から松前やへ行家内の者に安心  
盤橋内土手の場本舞臺都て土手際の体(お助)  
の荷を卸し(音扇新助)中間まで大福餅を喰て居る  
三日ハ寒い風が吹(新)吹といへは今日吹上で松前や一件  
の調を今度大久保様か成るそうだと云乍三人は入(左團  
次)の太助出て(左)さつき松前やへ往て来たが女の仕度  
ハ長る物だ御漸進の見へぬいで旦那が見へるト上手より  
(菊五郎)の五郎兵衛を木瓜に乗(新相中)の非人かつき  
(喜知六)小家頭(左ハ)同心附添出る(喜知)内証の咄も有  
ふから向ふの日向で待て居升ふ(左)そふして下さい(喜  
知)非人は入(左)旦那とん目よか達成れたな(菊)よふ  
尋て来て下された(菊)無實の罪と知乍卯之助が責苦を助  
度罪も落し心の内を察して下され(左)くわしむ譯を聞升  
た故わしが親分大久保様よか頼申せはか命は助り升程よ  
鑑甲の子細を云と云(菊)いどふ有ても忠孝の二字に  
替難く賊の汚名を受けても子細は明さぬ(左)御尤では無い  
升が不正な品ではないかと疑ふは凡夫の悲しさト彫物を  
見せ一心命を懸ひに立他言は致さぬ(菊)其氣性を見込み  
子細を咄さん父は津輕の家老我幼年の頃母ハ病死後妻を

人は呆れりこゝろし道具廻る

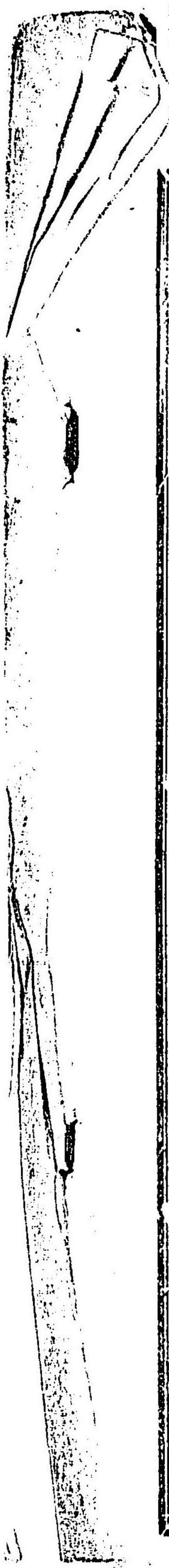
本舞臺式重大久保邸庭先の体愛に(仲藏)の彦左衛門(竹  
次郎尾と五郎)氷尾矢部まで(竹)只今藤田が御老体へ申  
上た太助めは我々や友達の様よ心得て(尾と)途中で彼よ  
出合升と實も赤面致升(仲)夫故是へ呼出し徳してやらぬ  
ば相成ぬ(尾と竹)是も居てお詫を致と等なれと本郷の近  
藤方よ内用ムればお暇申ト兩人向ふへは入(鶴)(左)を引  
立来る(鶴)今御臺所で申た事御前の前で申せ(左)いお  
くつて倒るる物かと云兼る(仲)そちや是迄の恩の忘却は  
致そまいな(左)忘れぬ證據は此お邸の方へ足も向てい寐  
升ぬ(仲)忘れぬものが何故狸親仁と申た(左)狸親仁の負  
乏郎ト悪口を並へ立る故最了簡がト(仲)刀と拔(左)は兩  
肌をぬぐ(仲)(左)の腕に念佛の六字を彫己が各の命と彫  
しは(左)覺期の遠からして居升(仲)望と有らば(左)御前  
暫く(仲)待とは命が惜いか(左)天下の大事を申上た上死  
たふムる(仲)天下の爲とは(左)お人拂ひをト(仲)そ(鶴)  
を退る(左)松前屋五郎兵衛が無實の次第を委敷咄す  
(仲)原田伊豫が日頃の悪説何にも松前やが一命助遣を  
(左)其お詞を聞上は私をお手討まして下さい(仲)心よも

天竺カツラ川



迎ひ出生の子を世継よせんと繼母の讒に町人と成程經て父の病死紀念も賜る錯甲と讓狀其後妹房へ嫁を取り家を賣子よ繼せたり是を惡さまに申時の繼母も上の御所置を受古まは家のかきんと成故云ざりしぞト(まう調)のか沙(竹松)の松太郎出て(菊)も取とぐり別を惜むせりふ有る(菊之介)の卯之助出主従の別を有て(喜知)よせき立られ一同上下へは入(小園次)の次郎介(門藏)の母と出合頭よ突當り(門)怪我を爲を(門)の巾着より藥を出し介抱する(小)婆さん此巾着いかめへのり(門)是を行衛の知ぬ房太郎ト云悴のト聞(小)卯之助は弟ど知りか袋や弟どが恩返しに松前やを助け様と改心の思入宜敷道具廻る(吹上御評定の場)本舞臺高武重真中(鶴藏)の伊豫守上手(仲藏)の彦左衛門下手に(松助)の内匠(團八竹次郎)の老中(尾と五郎橋次)若年寄(魁藏さい助)の目附平舞臺以前(菊五郎菊之助(鶴)五郎兵衛白狀致せ一通金子を盗取中間小疵を付し相違ないな(菊)相違入り升ぬ(鶴)不殿彼は相違ないと申居升(仲)相違有無の論有て中出か調(小)内藤が工の次第を申上(小菊之)兄弟有て(仲)片落成る裁判は内縁タムる故か(鶴)何事か(仲)奉行の落度は天下の瑕瑾五郎兵衛卯之助も科ない(鶴)未詮議が殘居るハ錯甲の盗し品でムる(仲)五郎兵衛錯甲の其出所を包せ申せ(菊)此義斗い

か様も仰有共申さぬと云(仲)巾さぬ上の賊に落ねば相あらぬ(菊)賊も落ても申上ぬ(鶴)五郎兵衛を半内へ引立に向より以前の(左園次)出只今御詮議の錯甲の義に付申上る義がムり升る(菊)太介殿夫を云れては(左)云て悪いならか前様から大久保様へ(菊)夫を打明る位なら此苦みの致ませぬ(左)忠孝を思召の御尤下云きは私の申升うが(仲)五郎兵衛包を申せ(菊)是非なく(左)よ咄せし通り申上る(鶴松)扱ひ不正の品では有さるの(左)是で明りが立こんを嬉敷事いさい此時(まう)讓狀を持出る(仲)見て父五左衛門より讓狀實印居し儲を證據(鶴)偽筆成りも斗れす此時(門藏)の主膳出津輕の家來か目利の仕る某が持參あしたる印鑑と引合すれば相違ムらぬ(仲)兩人の細目を解(菊)盜賊の汚名も晴(まう)是といふのも大久保様の厚か情(左)か禮は詞よ盡し難し皆々有難く存升る(仲)無實を訴へ出し内藤内田近藤との評定の上御所置有れば御沙汰を相待き(松)承知致してムる(仲)悪事よ荷擔の者改心なし自訴に仍て構なし(中間)有難ム入り升る伊豫守を内縁に依て邪な捌をさせし科により奉行役は今日限り(鶴)悪入でムり升(仲)太介は訴により五郎兵衛が一命助るのみならず天下の恥辱も成さる故褒美を取と(左)有難ム入り升る(門)此由主人へ申松前やの所置致せてムる(仲)悪は亡ひ善は榮へト皆々引張宜敷幕



書筋

特54  
20



074848-001-9

特54-20

新富座筋書

斎藤 長八刊

M16-21

CEK-0202

